

## 誤り訂正符号

通信途中でのノイズ (雑音) による誤りに  
どう対処するか

→ 多少の誤りなら検出・訂正できる仕組みを  
数理技術により実現 (誤り訂正符号)

情報通信中に誤り (らしきこと) に出遭ったとき

- 聞き直す (より安全なプロトコルの採用)
- 見当を付ける (誤りの自動訂正)

→ 冗長性を利用して安全性を確保

## 誤り訂正符号 (お話)

「誤りの自動訂正」が出来るように  
予め適切に冗長性を持たせて通信する

- 誤り訂正性能は高く
- とは言えなるべく効率的に

→ 有限体上の線型代数・代数幾何などの  
数理論理構造を利用

## 誤り訂正符号

誤り検出:

符号  $C^* : S^* \rightarrow T^*$  で、  
受信した語  $y \in T^*$  が  $y \notin \text{Im}C^*$  なら誤り

誤り訂正:

正しくは  $y$  に “一番近い”  $x \in \text{Im}C^*$  だろう

## 誤り訂正符号

受信語  $y \notin \text{Im}C^* \subset T^*$  で誤り検出

→  $T^*$  全部は使わない

→ 冗長度を持たせて誤り検出・訂正

とは言え

- より効率良く (冗長度少なめ)
- より高い誤り対処性能を持つ  
(誤りが沢山あっても大丈夫)

ものが望ましい

## 誤り訂正符号

以下では、

- 生起確率の違いを考慮しない
- 等長符号のみを考える  
(全ての符号語が同じ長さ)

効率良い情報源符号で符号化された文字列を  
一定の個数毎に切って再符号化する  
と想定 (通信路符号)

## 誤り訂正符号

### 符号

$$\mathcal{C} : S \longrightarrow V := T^n \quad (n : \text{符号語長})$$

の像  $\text{Im}\mathcal{C} =: U \subset V$  のみが大事

→ 寧ろ、像  $U$  をも単に  $\mathcal{C}$  と書き、  
これを符号と呼ぶ： $\mathcal{C} \subset V$

## 誤り訂正符号の性能を表すには

- 符号長  $n$  (当座固定)
- 符号語数  $M := \#C$  (大きいほど良い)
- 訂正出来る誤りの数  $t$  (大きいほど良い)

しかし一般に、

「 $M \longrightarrow$  大」と「 $t \longrightarrow$  大」とは

相反する要求!!

## 誤りの訂正

符号  $\mathcal{C} \subset V = T^n$  で、

- 受信語  $y \notin \mathcal{C}$  によって誤り検出
- $y$  に “一番近い”  $x \in \mathcal{C}$  が正しい、  
として誤り訂正

→ “一番近い” とは？

→  $V$  に “距離” を導入  
(通常 **Hamming 距離** を用いる)



## 距離の公理

$X$  : 集合

$d : X \times X \longrightarrow \mathbf{R}_{\geq 0}$  :  $X$  上の距離  
(metric, distance)

であるとは、

- $d(x, y) = 0 \iff x = y$
- $d(x, y) = d(y, x)$
- $d(x, y) + d(y, z) \geq d(x, z)$   
: 三角不等式 (triangle inequality)

## Hamming 距離

$V = T^n$  上に次で定まる距離

$$d : V \times V \longrightarrow \mathbf{R}_{\geq 0}$$

を  $V$  上の **Hamming 距離 (distance)** と呼ぶ :

$\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n), \mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n) \in V$  に対し、

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) := \#\{i \mid x_i \neq y_i\}$$

## 誤り訂正の性能

$$\mathcal{C} \subset V = T^n$$

$n$  箇所のうち何箇所違ってても訂正できるか？

= 距離が幾ら以内なら訂正できるか？

$t$  箇所違ってても一意に訂正できる

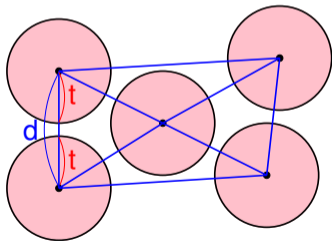
$\iff \forall \mathbf{y} \in V$  に対し

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \leq t \text{ なる } \mathbf{x} \in \mathcal{C} \text{ は高々 1 つ}$$
$$(\#\{\mathbf{x} \in \mathcal{C} \mid d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \leq t\} \leq 1)$$

## 誤り訂正の性能

$d := \min\{d(\mathbf{x}, \mathbf{x}') \mid \mathbf{x}, \mathbf{x}' \in \mathcal{C}, \mathbf{x} \neq \mathbf{x}'\}$   
:  $\mathcal{C}$  の最小距離 (**minimum distance**)

$d \geq 2t+1$  なら一意に訂正可能  $\longrightarrow t = \left\lfloor \frac{d-1}{2} \right\rfloor$



## 誤り訂正符号の性能を表すには

- 符号長  $n$  (当座固定)
- 符号語数  $M := \#C$  (大きいほど良い)
- 訂正出来る誤りの数  $t$  (大きいほど良い)

→ 訂正性能  $t$  は最小距離  $d$  で計れる!!

## 誤り訂正符号の性能を表すには

- 符号長  $n$  (当座固定)
- 符号語数  $M := \#C$  (大きいほど良い)
- 最小距離  $d$  (大きいほど良い)

→  $(n, M, d)$ -符号

## 誤り訂正符号の性能を表すには

- 符号長  $n$  (当座固定)
- 符号語数  $M := \#C$  (大きいほど良い)
- 最小距離  $d$  (大きいほど良い)

「 $M \longrightarrow$  大」と「 $d \longrightarrow$  大」とは  
相反する要求!!

問題:  $n, d$  を固定した時の  $M$  の上限は ?

## 符号語数の評価

問題:  $n, d$  を固定した時の  $M$  の上限は ?

$d$  : 設計距離

$$A_q(n, d) := \max\{M \mid \exists \mathcal{C} : q \text{ 元 } (n, M, d)\text{-符号}\}$$

→  $n, d$  と  $q := \#T$  とで評価する



## 符号語数の評価

Hamming 距離で “半径  $t$  の球” の元の個数は?

$B(\mathbf{x}, t) := \{\mathbf{y} \in V \mid d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \leq t\}$   
: 中心  $\mathbf{x}$ , 半径  $t$  の球体

$$\#B(\mathbf{x}, t) = \sum_{k=0}^t \binom{n}{k} (q-1)^k$$

## Hamming の球充填上界

(sphere-packing bound)

$q := \#T$  のとき、

$(n, M, 2t + 1)$ -符号が存在

$$\implies M \left( \sum_{k=0}^t \binom{n}{k} (q-1)^k \right) \leq q^n$$

従って、

$$A_q(n, d) \left( \sum_{k=0}^t \binom{n}{k} (q-1)^k \right) \leq q^n \quad (t = \lfloor \frac{d-1}{2} \rfloor)$$

## Gilbert-Varshamov の下界

$q := \#T$  のとき、

$$A_q(n, d) \left( \sum_{k=0}^{d-1} \binom{n}{k} (q-1)^k \right) \geq q^n$$

即ち、

$$M \left( \sum_{k=0}^{d-1} \binom{n}{k} (q-1)^k \right) \leq q^n$$

$\implies (n, M, d)$ -符号が存在

問題:  $n, d$  を固定した時の  $M$  の上限は ?

符号語数  $M$  の大きい符号を  
組織的に構成するには、

$C$  の元がなるべく “均等に” 分布する  
のが望ましい

→  $V = T^n$  の持つ数理構造 (対称性) を利用  
... 線型符号